

最近話題となっている病害虫

和歌山県果樹試験場うめ研究所 下村 友季子

モモヒメヨコバイ

〔旧：ウメシロヒメヨコバイ（仮称）〕

学名： *Singapora shinshana* (Matsumura)

■はじめに

モモヒメヨコバイ *Singapora shinshana* (Matsumura) (紙谷, 2021) はカメムシ目ヨコバイ科に属し、中国、台湾、韓国、北朝鮮に分布する。国内では沖縄県でのみ確認されていたが、2019年9月に和歌山県田辺市周辺の複数のウメ園において被害が確認され、本州初の事例となった。2020年以降、国内で次々と被害が確認され、2022年1月現在1都2府13県で特殊報が発表されている。

■形態

成虫の体色は黄緑色で、体長は3～3.5mmである(図1)。複眼は黒色で、頭頂部に黒点がある。若齢幼虫は薄い黄色で、終齢幼虫になるにつれ成虫と同じ黄緑色になる。



図1 モモヒメヨコバイ成虫

■生態

幼虫と成虫が葉を吸汁することで加害する。吸汁された部分は小さな点の形で脱色し、葉全体が吸汁されると白化して見える(図2)。吸汁の際、葉緑素も同時に吸汁されている可能性があり、今後の樹勢、収量への影響が懸念される。果実の被害は現在のところ報告されていない。甚発生樹に触れると成虫が飛び回り、葉裏には多数の脱皮殻が確認できる。また激甚化すると早期落葉する場合がある。

詳しい生態は不明だが、3月上旬の展葉とともに成虫が樹上に確認され始め、それ以降は幼虫と成虫が葉に混在しているが、11月中旬以降は再び成虫のみになり、落葉とともに確認されなくなる。このことから数世代を葉上で繰り返すと考えられる。落葉後に防風樹や混植されている近隣の常緑樹をたたき落とし法により調査

した結果、サンゴジュとヒサカキで成虫が捕獲されたため、周囲の常緑樹で越冬する可能性が高いことが示唆された(図3)。



図2 ウメの被害葉



図3 ヒサカキの葉裏で越冬している様子

■寄主植物

海外ではウメ、モモ、ナシ、リンゴ、サンザシ、ポポー、ポプラ等で報告されているが、国内ではウメ、モモ、スモモ、アンズ、オウトウ等のバラ科果樹での被害が報告されている。

■防除対策

2022年1月現在、本種に対して登録のある農薬はない。各都府県の特報では被害葉の早期発見と除去が推奨されているが、早期発見を逃した場合の除去は困難を極めるため、農薬の適用拡大が早急に求められる。

参考文献：

Cao, Y., Yang, M., & Zhang, Y. (2014) Zootaxa. 3774 (4) : 333-350
林正美・友国雅章・吉澤和徳・石川忠 (2016) 日本昆虫目録第4巻 日本昆虫学会 東京 : 311pp.
紙谷聡志 (2021) 植物防疫 75: 614-619
和歌山県農作物病害虫防除所 (2019) 令和元年度病害虫発生予察特殊報第4号。